

新井中央小だより

No. 296

ホームページ <http://azalea.ac.city.myoko.niigata.jp/araich-s/otayori/index.html>メールアドレス chuou@ac.city.myoko.niigata.jp

2024 (令和6) 年7月22日

命を大切に！ ～命をささえる努力と愛情～

1学期も残すところ2日となりました。「人権教育、同和教育を柱にした学校づくり」をスタートして早4か月です。先日、ゲストティーチャーから学ぶ6年生の「なかまの時間」の授業と親子活動を観て、6年生の人権意識の著しい高まりを感じました。人の気持ちや立場を押し量り、差別に対する悲しみや憤りの感情を抱いていました。自分の考えを仲間に伝え、これからの自分の行動のあり方を真剣に考え、自ら差別をなくしたいと力強く述べる姿から、大きな成長と最高学年としての頼もしさを実感しました。当校での今までの学年での積み重ねとともにゲストティーチャーのご指導、保護者・地域の皆様の愛情や支えのお陰と、感謝しています。



さて、夏休みの時期になると「命」について考えさせられます。お盆や終戦記念日などがありますし、家族や親戚とふれ合う時間、動植物と関わる時間も多からでしょうか。

今年の4月、群馬県出身の詩画家、星野富弘さんが78歳でお亡くなりになりました。星野さんは、中学校体育の教員になった24歳の時に、クラブ活動の指導で宙返りの練習中に、頭から転落し、頸椎を損傷し、首から下が全く動かなくなってしまいました。仕事どころか、自分でご飯を食べることも、トイレに行くこともできません。病院でただ天井を見るだけの寝たきりの生活が始まりました。生きる喜びも失っていたそうです。時間がたっても、手足が元のように動く怪我ではありませんでした。病院での生活が2年過ぎ、星野さんが自分で字を書きたいと思うようになります。仲良くしてくれた同室の患者さんが病院を移ることになり、寄せ書きを書くためです。手足が使えず、今のようにパソコンもない時代なので、「口でペンをくわえて書く」ことを試みました。それは、どれだけ難しいことか。紙に書けたのは点だけで、字にはなりません。でも、星野さんは字を書くことを諦めませんでした。「字を書くことを諦めることは、生きることを諦めることだ」と思ったそうです。その後、看護婦さんから、姿勢を変えれば文字が書けるのではないかとアドバイスを受け、努力を重ねて字を書けるようになりました。しかし、はじめはミミズが這ったような字でした。星野さんは、その後週に何度も看病に来てくれた女性と結婚され、詩画家となり、78歳までの一生涯活躍されます。星野富弘さんに関するホームページから、ぜひ星野さんが生前描いた詩画作品をご覧ください。驚く程素晴らしい数々の作品を残されています。作品から星野さんの思いが伝わってきます。星野さんは、目標をもって「努力」すること、そして傍で看病を続けてくれたお母様、奥様、看護婦さん、仲間の励まし、つまり「愛情」を受けたことによって、あきらめかけていた自分の「命」を、とても大切にしました。

25日から夏休みに入ります。どうかご家庭でも「自分の命」「他者の命」を大切にすることについて話題にしてみてください。「お盆の間、先祖から命がつながっていることを家族で考える」「おじいちゃんやおばあちゃんから、日本でも戦争で大切な多くの命が失われたお話を聞く」「家



に持ち帰ったアサガオや昆虫を大切に世話する」など、よい機会になると思います。また命に関わる絵本や本などを家族で読み合うのもよいと思います。星野さんの詩画集や絵本「100万回生きたねこ」などは、大人でも子どもでも命の尊さを深く考えさせてくれます。私も何度も読み返しています。裏面に、夏休み中に「命を守る」ことについて書きましたのでご覧ください。子どもたちにとって充実した夏休みになることを願っています。(校長 小林 朋広)